かれんと

―女性と仕事―

Current:カレント
―時代の流れあるいは新しい潮流―

「女性も仕事を持つのはあたりまえ」という考えが広まりつつあります。しかし、せっかく仕事に就いても「女だから」とか、「子どもができたから」という理由で差別を受けたり、職場にいづらくなったという例が後を絶ちません。

家族や職場の人たちがもっと理解を、ということも大きな課題の一つではありますが、女性自身も「女だから」という狭い考えにとらわれてはいないでしょうか。

夫のためでなく、子どものためでなく、自立した一人の人間として、自分の人生を考えてもよいのではないでしょうか。今回は、仕事に生きがいを持って生き生きと働いている、3人の女性を紹介します。

千渡
島　和代さん(31)
化粧品販売
家族/夫・長男・長女

女性も資格を持って仕事をした方がよいと考え、看護婦として働いていた島さんですが、結婚を機に自分で始められる仕事をしたいと思い、現在は3歳と1歳の子どもを保育園に預け、化粧品販売の代理店の所長として働いています。

「この仕事はやる気があれば研修を受けて誰でも始められます。この仕事を選んだ理由は、自分のペースで仕事ができてノルマがないことです。そして、企業理念として女性の地位向上・男女平等を掲げていることです」

お客さまに合わせて、平日だけでなく土日に仕事に行くこともあります。仕事で子育ての時間が少ない分、スキンシップを心掛けているそうです。「家事を少し後回しにしても、子どもを抱っこしたり、お話をしたりするんです。子どもとの時間は大切にしています」

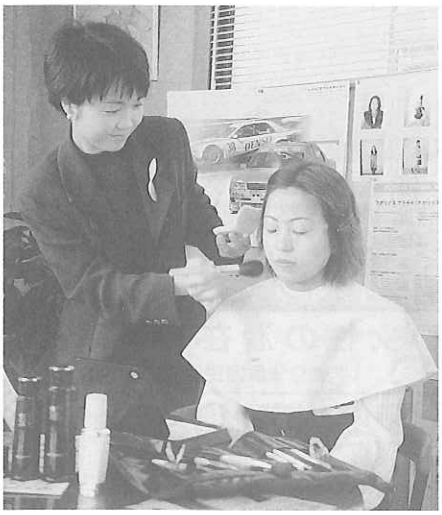
夫の協力について尋ねると、「平日は夜遅くならないと帰ってきませんので、あまり家事や子育てに関わってもらえません。でも、休日など時間のある時はやってくれるんです。夫婦で助け合っていきたいと思います」

仕事に打ち込むだけでなく、いろいろなことに関心を持って、「かぬま女性学セミナー」や「あきんど塾」でも勉強し、週に一度はエアロビクスに通い、体力づくりも心掛けています。

「ボランティア活動で高齢者施設に行き、希望者にメイクアップをしています。化粧一つで、表情が明るく生き生きとなります。心理的にも気持ちが外に向く効果があるのではないかと思います。美容は健康のためにもいいのではないでしょうか」

島さんに今後の抱負を聞くと、「これからも人との出会いを大切にして仕事をしていきたいと思います。将来は販売店を持つことを目指しています」と語ってくれました。

家庭も仕事も大切にする生き方が、女性にも男性にも必要だと思いました。



化粧一つで、表情が明るく生き生きします。
心理的にも外に向く効果があるのでは。

人との出会いを大切に

千渡
伊藤　芳江さん(45)
看護婦
家族/夫・長男・長女

仕事は私にとって生きることそのものなんです

伊藤さんは看護学校を卒業して以来、精神科一筋に勤務しているベテランです。

11年前、勤務先の病院がアルコールセンターを作るため、1カ月間の宿泊研修を要請されました。いつも「勉強だけは続けていかないと看護婦は務まらない」と考えていた伊藤さんにとって、それは願ってもないチャンスでした。

「ただ、7歳と4歳の子どもと、家事など何一つしたことのない夫を残して家を空けることが不安でした。でも夫は『責任ある仕事をするために勉強するのは当たり前。心配しないで行ってこい。』と言ってくれました。それから洗濯機の使い方から米の研ぎ方まで一つ一つ紙に書いて教え、2人で何度も家事のリハーサルをしたんですよ」

その後も「自分に与えられたチャンスは逃したくない」と実習指導者資格取得のために厚生省主催の49日間の講習会を受講したり、栃木県青年の船に指導者として参加したりといつも前向きです。

「講習会で家を空けた時、高校生になっていた長男は49日間ずっと自分のお弁当を作り続けていたんです。本当に驚きました」

仕事ばかりではなく、勤務先ではお囃子クラブと卓球クラブに所属し、地域ではママさんバレーも。「大声を出しての練習は何よりのストレス解消。こんなに楽しいことやめられません」と言う伊藤さんは、勤務予定に合わせてしっかりとスケジュールを立てての生活です。

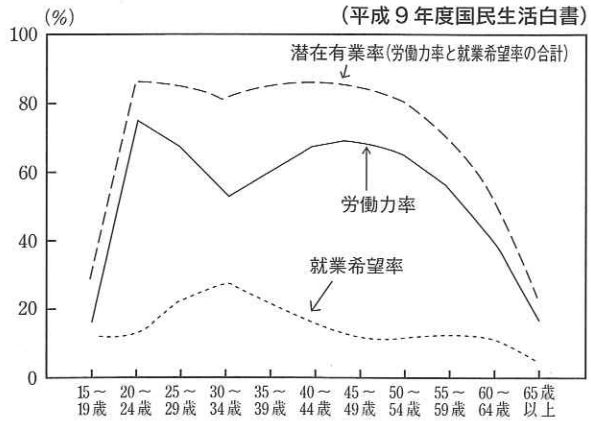
「不規則な勤務ですから、子どもたちとの間では連絡ノートをつけていました。長女が4年生の時、勤務を終えて夜中に帰宅したら、ノートに運動会の練習に使う小道具が明日必要とあり、それからあわててミシン掛けしたこともありました。ノートは時には親子の交換日記にもなりました。子どもたちの成長につれて文字が少しずつ大人びていくのが嬉しかったですね」

夫や子どもの応援で仕事を続けてきた伊藤さんは「仕事は私にとって生きることそのものなんです。なかなか心を開いてくれない患者さんと心が通い合った時は一番嬉しいですね」と言います。仕事への責任感が強く、専門職としての向学心も旺盛で、さわやかな笑顔の素敵な人でした。

子どもたちとは連絡ノートをつけていました。
それは時には親子の交換日記にもなりました。

M字にならない女性の潜在有業率

(平成9年度国民生活白書)



(備考) 1.総務庁「就業構造基本調査」(1992年)、「国勢調査」(1995年)により作成。
2.潜在有業率は、有業者数に就業希望者数を足したものを、女性の年齢別人口で除し、100をかけた値である。

入所者の笑顔に 仕事の喜びを感じて

玉田町
加藤　悦子さん(48)
寮　母
家族/夫・長男・次男
夫の両親

施設の開所と同時にこの仕事に就いて5年。寮母（父）20人をまとめる寮母長としてバリバリと仕事をこなす加藤さん。夜勤を含めて6通りの不規則勤務も「健康だけが取り柄ですから」と笑顔でこなしています。

そんな加藤さんも結婚後は専業主婦として家事・育児に専念していました。しかし、常に「何かしたい、社会に出たい」という気持ちを持っていました。そして、次男の幼稚園入園を機に、木工所の事務員として就職。

「初めてお給料をもらった時には、感謝の気持ちから家族皆に配りました。でも、一番嬉しかったのは、自分の欲しいものが誰にも遠慮せず堂々と買えることでした」と話してくれました。

現在の仕事に就くきっかけになったのは、地域のボランティア活動で一人ぐらしの高齢者への給食サービスをしたことでした。「君には福祉の仕事があっていると思う」という夫の言葉も大きな励みでした。

施設を利用している高齢者にとって、寮母さんは心の支えです。「私たちのことを待っているんですよ。『○○さん、お元気？お天気いいね』って声をかけるだけで、とても嬉しそうな顔を見せます。そんな笑顔を見た時、自分たちが必要とされていることを実感します。この仕事は、やっぱり職員同士のチームワークや家族の協力がないとやっていけません。私は皆に支えられているから、がんばれるんです。今ではこの仕事が私の天職だと思っています」

加藤さんはここに就職してからホームヘルパー2級の資格を取得、現在は介護福祉士の資格を取るため勉強中です。

「家族は協力的ですが、やはり家事の中心は私です。それでも時間を作って、地域のバレーボールチームで汗を流したり、友だちとショッピングなど自分なりのストレス解消をしています。でも一日にあと3時間あれば、もう少し勉強や仕事の情報交換などもできるのにと思います。」そんな加藤さんの今一番のリフレッシュは、夫婦で温泉に行ったり、コンサートを楽しむことのようです。

最後に「私の夢は、退職後仲間たちと小さなデイホームを作ることです」と明るく語ってくれました。

私たちのことを待っているんですよ。自分たちが必要とされていることを実感します。

まとめ

今回登場していただいた3人の女性は、常に仕事に前向きで、「女だから」という狭い意識にとらわれず、自分の足で歩いています。そして、家庭においても、夫も子供も自立し、個を尊重しあっています。

また、職場や地域の人とのふれあいを大切にしながら、明るく、楽しく、一生懸命過ごされていることに、女性のパワーを感じました。

「仕事を持つ」ということは、経済的な自立はもちろん、自己実現、また、社会とのつながりの中で自分の存在感も確認することができるのです。

現在、雇用者全体に占める女性の割合は40%近くに達しているにも関わらず、ジェンダーによる性別役割分業が慣習として根強く残っており、家事・育児は女性の手に多くゆだねられています。そのため、結婚・出産を機に退職せざるをえない女性も少なくありません。

今後ますます少子化が進み、高齢社会の中においては、女性の労働力は不可欠になります。女性が仕事を持ち、男性と平等に社会参画していくためには、家族の理解と協力、そして男女がともに職業生活と家庭生活を両立できる条件整備が必要ではないでしょうか。

REPORT ―女性の海外研修に参加して―

21世紀を人間の世紀に

森　明子（上久我）

平成10年度栃木県女性の海外研修に参加し、フランス・ベルギーを訪問しました。

この研修では、各地の施設や機関を視察し、女性の自立・福祉・教育・環境について学んできました。

パリの障害者自立援助協会は、障害を持つ人に正当な待遇が与えられ、本当の意味での市民権を得させることを目的として作られました。

そこで聞いた、次のような言葉に心を打たれました。

「障害を持つ人も、持たない人も、市民として同じ権利があります。今、経済問題が国の最重要課題となっており、障害者のことは後回しになっていますが、私たちは経済成長よりも、人間を考えています。

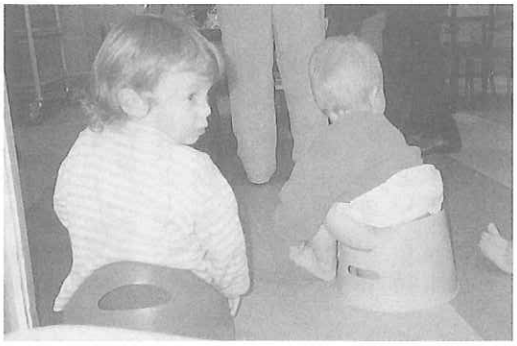
21世紀は人間の世紀にしなくてはなりません」

日本では人と違っていることがマイナスととらえられやすく、障害が差別へとつながります。障害を持つ人の障害に目を向けず、その人間を見てほしいと心から思いました。

ベルギーでは小学校を訪問しました。そこでの教育目標は、子どもの人格の発展を考え、責任ある市民をつくることにあります。

家庭と学校のそれぞれで、子どもたち一人ひとりが意見を持ち、考えを言える人間教育を行っていると感じました。

私は子どもの教育に関心があり、地域においても子どもたちと交流をしています。今回の研修で学んだことを活かし、子どもたちを一人の人間として人格を尊重し、これからも地域で活動していきたいと思っています。



ベルギーでは就学前の保育も無償です。

平成11年度の栃木県女性の海外研修はイギリス・フランスを訪問します。詳しくは、4月10日号の広報かぬまにてお知らせします。

INFORMATION ―お知らせ―

「私もひとこと」入選

9月25日号で、自分らしい生き方ができる社会を創るために「私もひとこと」を募集しました。次の方々の「ひとこと」を入選とし、啓発誌「男女共同参画社会の実現をめざして」に掲載しました。

「私もひとこと」
石塚三代子さん（上南摩町）
「会長は男性？」
大野　ミチさん（御成橋町）
「フィフティ・フィフティ」
岡本チヨ子さん（千渡）
「女性も積極的に」
小太刀美恵子さん（西鹿沼町）
「親から見た男女観」
松原　浩さん（東町）
「家庭の夫婦愛」
山木　春枝さん（仁神堂町）

啓発誌発刊のお知らせ

女性問題に対する理解を深め、ジェンダーを見直し、誰もが生き生きと暮らせる社会へ向けた一歩となることを願い、啓発誌「男女共同参画社会の実現をめざして」を発刊しました。

地区別懇談会・女性学習と啓発・かぬま女性プランの推進についてまとめてあります。

女性係にて配付していますので、希望者はご連絡ください。

POSTSCRIPT ―編集員から―

編集後記

今回の特集は、不況による失業率も高い時期で、取り組むのに難しい面もありました。

もうすぐ4月。暖かい日差しとともに明るい話題が生まれることを編集員一同期待しております。

ひとくちメモ

M字型就労

日本の女性の就業率は、25～35歳の結婚・出産期に一時低下し、子育てが一段落した40歳代で再び上昇するM字型として表されます。これは性別役割分業の意識が根強いのが大きな原因の一つと考えられます。

―ボランティア編集員募集―

「かれんと」は皆さんとともに作る女性情報紙です。

あなたも、ボランティア編集員になりませんか。

ご応募・お問い合わせは女性係　☎(63)2232まで。

〈編集〉ボランティア編集員　〈発行〉鹿沼市教育委員会　〒322－8601　鹿沼市今宮町1688－1　☎0289(63)2232